様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０４５５８

研究課題名（和文）日独における「教養」(Bildung) 概念の比較思想史研究

研究課題名（英文）A Study of the Comparative Thought History of "Kyoyo" (Culture) Concepts in Japan and Germany

研究代表者
櫻井　佳樹（SAKURAI, Yoshiki）

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：８０１８７０９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、18世紀末のドイツにおけるBildung概念の成立・展開とその特質、並びに20世紀日本の「教養」概念の成立・展開とその特質を明らかにした。
　前者に関しては、「ロマンチックラブからみたフンボルトの恋愛結婚と教養理念」（2018)並びに「教育学における他者論の問題」（2019）にまとめた。自我（個人）と世界の相互作用の中にBildungの本質を見るフンボルト理論を取り上げ、「他者論」的視点からBildung概念の特質を解明した。
　後者については、大正期から昭和初期の和辻哲郎などの思想家を取り上げ解明した。その結果昭和初期日本の「教養」概念にドイツ的Bildungの影響が強く見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日独の「教養」(Bildung)概念を比較する研究は稀有である。本研究は比較思想史の観点から、18世紀末に成立したドイツのBildung概念の成立・展開とその特徴、並びに20世紀に成立した日本の「教養」概念の成立・展開とその特徴を辿りつつ、両者の影響関係を解明しようとしたものである。教育が人格の完成を目指す営みであるなら、個の理想化を追求する自己陶冶(Selbstbildung)の思想を18世紀末ドイツのフンボルトに遡って明らかにすると共に、そうした理念が大正・昭和初期に日本に受容されていたのかを明らかにすることは、「教養」を考える上で重要な視座だと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the development and characteristics of the concept of "Bildung" in Germany at the end of 18th century as well as the development and characteristics of the concept of "Kyoyo" (Japanese culture) in the 20th century.
The former is summarized in "Humboldt's Love Marriage and Cultural Philosophy as Seen from Romantic Love"(2018) and "Problems of Others in Pedagogy"(2019). Humboldt's theory, which sees the essence of "Bildung" in the interaction between the ego (individual) and the world, was considered, and the characteristics of the "Bildung" concept were elucidated from the "another theory" perspective.
The latter was clarified by considering thinkers such as Tetsuro Watsuji from the Taisho era to the early Showa era. As a result, the influence of German "Bildung" was seen strongly in the concept of "Kyoyo" (culture) in early Showa Japan.

研究分野：教育学

キーワード：教養　Bildung　日独　比較思想史　フンボルト　ロマンチックラブ　他者論　大正教養主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

「教養」をめぐる問題は、現在においても高等教育上の問題として様々に論じられている。しかし竹内洋の『教養主義の没落』(2003)以来、日本における「教養主義」は、大正期に始まり戦前戦後を通して活発な現象であったが、大衆化社会の到来と共に 1970 年代には大学キャンパスから消えてしまった「亡霊」という通念が共有化されている。そして現代のユニバーサル段階の大学で求められる「教養」とは何かが、改めて問い直されているのは周知の通りである。だが一方で、そうした通念に囚われるあまり、「大正教養主義」とは何だったのか、その本質に目を向けなくなってしまったことも事実だと言えよう。明治時代の「修養」から大正時代の「教養」に変化することによって「型」を喪失したという唐木順三(2001)による批判が妥当なものか問い直している田中祐介(2004）の研究に見られるように、東西文化の様々な書物を読書することによって自己を陶冶するという「教養主義」は後世の見方であり、大正期の作家たちの思想世界・生活世界とは異なっていたという指摘は重要なポイントである。これからの「教養」の在り方を考えるためには、そもそも「大正教養主義」とは何だったのか、その事実に迫ろうとする研究が今こそ必要ではなかろうか。

一方ドイツ教育学界における Bildung をめぐるアクチュアルな課題は、経験的な陶冶研究(Bildungsforschung)と伝統的な哲学的な陶冶理論(Bildungstheorie)の架橋をめぐる問題である。その両者を架橋するテーマとして「自伝研究」が注目されていることが今日的動向である（ヴィガー・山名淳・藤井佳世(2014)参照）。

日独において、それぞれの関心にしたがって、別々に論じられてきたのが「教養問題」であるが、研究代表者はそうしたそれぞれの国や学問分野にしたがって異なる様相を見せる現象の背後にある「教養」(Bildung)の本質に遡及することによって、日本の「大正教養主義」における「教養」とは一体何であったのか、またその源流の一つとみなされるドイツの Bildung―これもまた時代と共に様々に変貌してきたのだが―から、いついかなる影響を受けてきたのかを明らかにしたいと考えた。

２．研究の目的

本研究を進めるに当たって、まず第 1 の課題は、18 世紀末に成立した Bildung 概念の特質を明らかにすることである。中心となるのは、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト(Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)の Bildung 理念の特質を解明することである。従来研究代表者の関心は、その成立過程に向けられ、青年期フンボルトの交友関係を洗い出すこと（伝記研究）に重点を置いてきた。本研究では、フンボルトの Bildung に関わる主要著作『国家活動の限界』(1792)等の初期作品を取り上げ、フンボルトの陶冶理論を体系的に解明する。 その際、メンツェ(Menze 1965)、ベンナー(Benner 2003)、コラー(Koller 2012)などの研究を参照しながら、とりわけ自我（個人）と世界の相互作用に Bildung の本質を見ていく。第 2 の課題は日本の「大正教養主義」における「教養」概念の特質を明らかにすることである。西田幾多郎、和辻哲郎、阿部次郎、三木清、倉田百三などを取り上げるが、重要なのは、1910-1920 年代の同時代のドイツの精神状況である。とりわけ第一次世界大戦後のドイツを直接訪れることによって、彼らはニーチェ、ショーペンハウアー、トルストイ、ハイデガーなどの実存主義思想やペシミズム思想の影響を受けたと考えられる。そうした仮説を検証し、大正教養主義の「教養」概念の特質を明らかにしていく。第 3 に、上述の二つの研究成果を基に、両者、すなわちドイツの Bildung

概念と日本の「教養」概念を比較し、その異同を見つけることである。そのことによって、18世紀末に成立した Bildung 概念が、20 世紀初頭大正期の日本において、いかに変貌したか、あるいは継承されているのか明らかにする。

３．研究の方法

本研究を遂行する上で重要なことは、Bildung 概念、並びに「教養」概念に関する文献の収集とその読解である。特に 18 世紀末のフンボルトの一次文献および二次文献の収集が重要であるが、そうした基本的な文献および複写資料は、研究代表者が平成７年から８年にかけてのドイツ連邦共和国・チュービンゲン大学での在外研究中、並びに平成 19 年、23 年、25 年、26 年の科学研究費による現地での資料収集および帰国以降現在まで適宜収集し、基礎的資料として活用している。一方で大正教養主義者に関する文献、彼らに影響を与えた 1910-20 年代の Bildung に関するドイツ語文献の収集が必要である。それらの文献収集と読解を通して比較研究を行う。

４．研究成果

上記目的にしたがって研究を遂行した。主として第１の課題に対応するのが、第１論文「ロマンチックラブからみたフンボルトの恋愛結婚と教養理念」と第２論文「教育学における他者論の問題―教育的関係論と陶冶論の視点から」である。

第１論文は、教育哲学会の『教育哲学研究』第 118 号編集委員会の執筆依頼の求めに応じて執筆した。社会学者ルーマン(2005)並びに大澤真幸(2004)にしたがって、18 世紀末から 19 世紀にかけてヨーロッパに生起した恋愛結婚としての「ロマンチックラブ」の特徴を、「愛の関係の自己準拠性」と「視点の二重性」すなわち「内在的な視点」と「超越的な視点」に見るとともに、ドイツにおいては恋愛と結婚と陶冶(Bildung)が結びついているという特殊性を指摘した。その上でフンボルトと妻カロリーネの関係性がその典型的な事例であるとともに、彼の教養理念の中にそうした経験が色濃く投影されていることを指摘した。

第 2 論文は、坂越正樹監修、丸山恭司・山名淳編『教育的関係の解釈学』東信堂、2019 年 3 月の第 7 章に掲載された大関達也（兵庫教育大学）との共著論文である。その第１節「教育的関係論から見た他者の問題」は、大関が執筆し、第２節「陶冶論から見た他者の問題」を研究代表者である櫻井が執筆した。陶冶(Bildung)概念は、自己と世界、自己と他者、自己と自己自身における相互作用を問題とするが、自己が他者なるものとの相互作用を介して、再び自己へ帰還するという構造とその特質について明らかにした。「陶冶」が自己関係、他者関係、世界関係における人間の反省能力及び形態化能力を意味するならば、人間の生涯における「教育」の措置や過程は、「陶冶」のそれに先行している。「教育」が教育されるべき者や未熟な者への外的な作用や働きかけを強調するのに対して、「陶冶」は自身の教育を対象にすることができる反省的遂行を強く協調している。つまり、「陶冶」とは「教育」を前提としつつ、自己と自己、自己と他者、自己と世界の関係を反省し、その在り方を自ら創り上げる自己形成概念であることを指摘した。さらに、フンボルトの陶冶論として、「諸力を一つの全体へと最高で最も調和的に陶冶すること」「自我と世界の相互作用としての陶冶」「陶冶の対象とメディアとしての言語」について述べるとともに、フンボルト陶冶論における「他者」について整理した。

第２課題と第３課題を扱ったのは第３論文と第４論文である。第３論文はドイツ・フライブル

ク教育大学においてドイツ語で実施した招待講演原稿である。第 3 論文では、日本の大正教養主義の代表的論者和辻哲郎と阿部次郎、三木清ならびに昭和戦前期の「教養」概念の再生について論じた後、日本の「教養」概念とドイツの Bildung 概念の比較研究を行った。また第 4 論文は、第 3 論文の翻訳原稿を加筆修正したものであり、2019 年 11 月 30 日に松山大学で開催された第 71 回中国四国教育学会における発表原稿を加筆修正したものである。

筒井(1995)によると、「教養」概念を Bildung の意味で最初に用いたのは和辻哲郎の「すべての芽を培え」（『中央公論』1917 年 4 月号）の次の言葉等であるという。「この『教養』とはさまざまの精神的の芽を培養することです。ただ学問の意味ではありません。・・・（中略）・・・これはやがて人格の教養になります。そうして、その人が『真にあるはずの所へ』その人を連れていきます」（和辻：1963:133）。この時期は、和辻が大学卒業後、キルケゴール及びニーチェ研究から仏教文化や日本文化へ移行する時期であった。和辻は、ニーチェの文化批判の影響のもと、日本における本物の文化のための基礎を作ろうと望んでいたのである。和辻はここで Bildung という言葉を明示してはいない。しかし筒井は内容から同義であると考えたものと思われる。

一方『合本　三太郎の日記』(1918)で大正教養主義の代表的人物と目される阿部次郎においても、その著において Bildung 概念について直接論じてはいない。しかしながら、昭和初期 1933 年、第二高等学校での講演原稿「文化の中心問題としての教養」（阿部 1960:334-349）においては、「教養」は Bildung の翻訳語であると明確に述べている。ヘーゲルを参照しつつ、阿部によれば、「教養」は、ある素質を持った精神的存在の「人間らしさ」の理念を達成しようとする努力の中に存在する。「教養とは理念を指導原理とする精神の自己加工である」(阿部　1960:337)。

以上のような分析の結果、日本の教養概念の構築に際してドイツの Bildung 概念ははっきりと受容されていたということが明らかになった。大正期に受容され、昭和戦前期にはそのことを自覚的にとらえ始めていたと言える。三木清は大正教養主義を回想し、教養とともに文化が語られたことを指摘し、「このような文化とか教養とかの理念は特にドイツ的なものであり、そしてこのドイツ的理念は啓蒙思想の克服と称する立場と密接に関係している」と述べていたのである。

これらの研究成果によって、当初の目的を完全に果たしたとは、残念ながら述べることはできない。とりわけ第２の課題については、端緒的なものに留まり、今後の課題としてさらに研究を遂行していかねばならない。

しかし、この科学研究費が研究遂行において大きな礎となったことは間違いない。とりわけドイツ連邦共和国フライブルク教育大学の招待講演で、50 分間の質疑応答を含むドイツ語による講演を成功させたことは、研究者として大きな自信をもたらしたものであり、日本の「教養」概念とドイツ語の Bildung 概念を比較研究するという研究課題をドイツにおいて共有できたことは意義のあることであった。その機会をいただいたフライブルク教育大学のトーマス・フール Thomas Fuhr 教授にこの場を借りて謝意を表したい。

日本学術振興会をはじめ関係各位に改めて謝意を表するとともに、今後ともさらに研究を発展させ、残された研究課題の解明に努めていきたい。

なお、各論文の初出は以下の通りである。

第１論文　櫻井佳樹「ロマンチックラブからみたフンボルトの恋愛結婚と教養理念」教育哲学会『教育哲学研究』第 118 号 2018 年 93-108 頁

第２論文　櫻井佳樹　大関達也「第 7 章　教育学における他者論の問題―教育的関係論と陶冶

論の視点から」(坂越正樹監修　丸山恭司・山名淳編『教育的関係の解釈学』東信堂、2019年3月 97-112頁)

第3論文　Yoshiki Sakurai: Akzeptanz und Entwicklung der Bildungskonzepte in Japan (日本におけるBildung〔教養〕概念の受容と展開)　【ドイツ連邦共和国・フライブルク教育大学における招待講演原稿：2019年11月14日】

第4論文　櫻井佳樹「戦前期日本における教養(Bildung)概念の成立と展開」中国四国教育学会『教育学研究紀要』(CD-ROM版)　第65巻　2020年3月　221-226頁

〈引用・参考文献〉

阿部次郎　1960『阿部次郎全集　第十巻』角川書店

阿部次郎　2008『新版　合本三太郎の日記』角川書店

大澤聡編　2017『三木清　教養論集』講談社

大澤真幸　2004『性愛と資本主義』青土社

唐木順三　2001『現代史への試み』燈影舎

竹内洋　2003『教養主義の没落』中央公論社

田中祐介 2004「思考様式としての大正教養主義－唐木順三による阿部次郎批判の再検討を通じて－」(『国際基督教大学学報、３－Ａ、アジア文化研究』30巻51-69頁)

筒井清忠　1995『日本型「教養」の運命』岩波書店

和辻哲郎　1963『和辻哲郎全集　第17巻』岩波書店

ヴィガー・山名淳・藤井佳世 2014『人間形成と承認』北大路書房

Benner, D. 2003, *Wilhelm von Humboldts Bildungstheorie.* Weinheim/München.

Humboldt, W. v., 1792/1980, Ideen zu einem Versuch, die Gränzen der Wirksamkeit des Staats zu bestimmen. In: *Wilhelm von Humboldt, Werke in Fünf Bänden* 1 Stuttgart. S.56-233.　(邦訳：フンボルト　2019『国家活動の限界』京都大学学術出版会)

Ders. 1793/1980, Theorie der Bildung des Menschen. In: *Wilhelm von Humboldt, Werke in Fünf Bänden* 1 Stuttgart. S.234-240.

Koller, H.-Ch., 2012, *Bildung anders denken*. Stuttgart.

Luhmann,N. 2012 *Liebe als Passion.*　Frankfurt am Main.
(邦訳：ニクラス・ルーマン 2005『情熱としての愛』木鐸社)

Ders. 1993 *Gesellschaftsstruktur und Semantik*, Bd.1 Fankfurt am Main
(邦訳：ニクラス・ルーマン　2011『社会構造とゼマンティク１』法政大学出版局)

Ders.1993 *Gesellschaftsstruktur und Semantik*, Bd.3 Fankfurt am Main
(邦訳：ニクラス・ルーマン　2013『社会構造とゼマンティク３』法政大学出版局)

Menze,C. 1965 *Wilhelm von Humboldts Lehre und Bild vom Menschen*, Ratingen.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 櫻井佳樹	４．巻 118
２．論文標題 ロマンチッククラブからみたフンボルトの恋愛結婚と教養理念	５．発行年 2018年
３．雑誌名 教育哲学研究	６．最初と最後の頁 93-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 櫻井佳樹	４．巻 65
２．論文標題 戦前期日本における教養(Bildung)概念の成立と展開	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中国四国教育学会『教育学研究紀要』(CD-ROM版)	６．最初と最後の頁 221-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Yoshiki Sakurai
２．発表標題 What is a "Smart Person"? - A Study of Education and the Learning Required for Japan's Future
３．学会等名 The 7th Joint Symposium between Chiang Mai University and Kagawa University（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yoshiki Sakurai
２．発表標題 The birth and evolution of the "Kyoyo"(general education) concept in higher education in Japan
３．学会等名 The 7th Chiayi-Kagawa University Workshop（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoshiki Sakurai
２．発表標題 Akzeptanz und Entwicklung der Bildungskonzepte in Japan
３．学会等名 ドイツ・フライブルク教育大学公開講演（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 櫻井佳樹
２．発表標題 日本における教養(Bildung)概念の成立と展開
３．学会等名 中国四国教育学会第71回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 坂越正樹監修、丸山恭司・山名淳編、杉山精一、松村納央子、衛藤吉則、岡谷英明、渡邊隆信、櫻井佳樹、大関達也、野平慎二、矢野博史、藤川信夫、奥野佐矢子、鈴木篤、小川哲哉、小林万里子、時津啓、白銀夏樹、丸橋静香他８名	４．発行年 2019年
２．出版社 東信堂	５．総ページ数 268
３．書名 教育的関係の解釈学	

１．著者名 教育思想史学会	４．発行年 2017年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 888
３．書名 教育思想事典 増補改訂版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考